ラフカディオ・ハーンと「開かれた精神」

島根県立大学短期大学部教授　小泉　凡

一般財団法人人間自然科学研究所が編集された『朝鮮半島と日本列島の使命』には、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「神戸クロニクル」紙に書いた論説記事の幾篇かが抜粋されています。『怪談』の著者として知られる八雲は、実は人生の大半をジャーナリストとして過ごしました。具体的にはアメリカでの15年余りと日本の神戸時代がそれにあたります。神戸クロニクル社への勤務は、わずか１年未満でしたが、90篇近い論説記事を書き、その中には、日本のみならずロシア・中国・朝鮮半島の未来を展望した文章も少なからずみられます。また、八雲は1894年１月に熊本で行った「極東の将来」という講演の中で、将来的には西洋より東洋が大きな意味をもつ時代が来ること、そして「最も辛抱強い、最も経済的な、最も簡素な生活習慣をもつ民族が勝ち残る」と言っています。それは、「自然と最もよく共生でき、必要最小限の生活で満足できる」人々こそ生存最適者だという信念に基づいている、つまり、「シンプルライフ」と「共生」の維持が日本の将来において最も大切だと考えていたのです。「共生」の思想は21世紀を生きるわれわれ

にとって大きな意味をもつことは言うまでもありません。

ヨーロッパに生まれ育った八雲は、地球を3分の2周して日本にたどり着きました。それゆえ、多くの異文化体験をしています。子供のころにギリシャの多神教の世界やケルトのアニミズムの世界に魅了され、アメリカではラテンヨーロッパとアフリカ文化の融合によって開花したクレオール文化やネイティブ・アメリカンの文化を垣間見、さらに日本ではケルト世界に通じる神道や民間信仰に接し共感しました。そのようにして偏見の少ない多文化意識が形成されていったものと思われます。八雲のいう「共生」とは、異文化間の共生だけではなく、人間と自然との共生や、人間と異界との共生も視野に入れたものでした。人間世界だけで完結してしまうことは、人間の謙虚さや畏怖する心を忘れさせてしまう危険があると思ったからです。そして、多くの怪談を採集し、魂を吹き込んで英語に翻訳したのも、怪談つまり異界と人間が交錯する話には真理（truth）があると考えたからでした。約束・畏怖・秘密・好奇心・愛……など、怪談が発するメッセージには、100年後・200年後の人々もその普遍性に関心をもち続けるに違いないと予測し、そこから学ぶべきことも多くあると考えたのです。今、まさにそのような八雲の思いが再評価される時代が来ているように思われます。

八雲の生誕160年・来日120年にあたる2010年、松江では2つの記念事業が開催されました。ひとつは「ハーンの神在月―全国小泉八雲の会＆ミュージアムの未来を考えるサミット」で、もうひとつはハーンの精神性を造形芸術で世界のアーティスト

が表現する美術展です。2つの事業に共通する趣旨は、八雲のもつ“Open Mind”つまり「開かれた精神」を現代社会や未来に生かすとすれば、どんな可能性があるかを模索しようというものです。小松社長様には趣旨にご賛同いただき、多大なご協賛を賜りました。

八雲の極東の将来に対する考え方には、小松社長がめざす「共生」「和譲」というキーワードと響き合う考え方があるように思われます。一国や一地域のみの権益ではなく、世界全体を見渡した上で東アジアの未来を考えていくことは非常に大切なことだと思われるからです。

次頁を表示